

中学生・高校生の自我同一性の形成に関する研究 — 中高生の「自己語り」と自我同一性尺度得点の分析から —

駒井 恵里子

研究Ⅰ 自己語りが自我同一性の感覚に及ぼす影響についての研究

1. 問題と目的

近年、青年期の問題として取り上げられる自己や自我同一性を捉える枠組みが変化してきている。従来、心理学の研究では「AならばB」という命題を実証する論理実証的思考のパラダイムが用いられてきたが、「AならばB」のAとBの事象を結びつける意味を考察するという物語的思考に基づいた研究が始められている。物語的思考とは、二つの事象に対して意味付けし、つなぐことが目標とされる。もとは何のつながりもなかった二つの事象がある意味づけによって結び付けられるということはそこに一つのストーリー（物語）が出来上がるということである。このような物語的視点に立ち、自己を捉えようとする研究が始められている（榎本，1999，2000a，2002）。「自己＝語られる物語」と定義することによって自己を捉える際に時間軸が導入でき、物語的思考の特性として複数の意味を同時に持ち合わせることが可能なため、自己を単一の視点からだけでなく複数の視点で捉えることが可能になる。語りによって自己を捉える試みがなされる一方で、語りによる自己の変容もまた起こりうるという指摘が榎本（2000a，2002）によってなされている。

このように、自己を語りとして捉えるアプローチは、時空を超えた自己全体像を包括的に捉える枠組みとして期待できる方法である。また、語る行為自体が自己を形成するという指摘もある。榎本（2000a）は「物語としての自己は個々の出来事の背後に潜んでいるため意識化されにくく、他者に対して自己を物語するという行為を通して改めて認識され、明確な形を取ると指摘している」や「そうした行為（自己語り）を通して、本人の意識の中でも自己というものが具体的な形をとるようになり、自分の人生の意味というものも理解できるようになる」というように、自己について語ることによって人生の意味を発見することにつながると指摘している。自己について自分ひとりで振り返るという作業も内省を促すものではあろうが、他者に対して語る行為に意味が見出されている。これまで、理論的、経験的にアイデンティティと自己語りの関連が論じられることはあったが、実証的に語りがアイデンティティ感覚に及ぼす影響について調査した研究は行われていない。よって本研究では語る行為がアイデンティティ感覚にどのような影響を及ぼすかに焦点を当てて調査を行った。

2. 方法

調査対象者 質問紙調査は、X年10月下旬と12月上旬の2回行われた。一回目の質問紙調査対象は中学生116名、高校生109名の合計225名であった。二回目の調査対象は中学生114名、高校生105名の合計219名であった。

インタビュー調査は、X年10月下旬から12月上旬にかけて行われた。調査対象は中学生7名と高校生2名の合計9名で、高2の調査対象者1名のみが男性であり、それ以外は女性であった。

質問紙 青年期の同一性の感覚を測定するために多次元自我同一性尺度：MEIS（谷，2001）を一部修正して用いた。本研究で使用された質問紙は、MEISの全項目である20項目で構成されているが、元項目を調査前に数人の中学生に閲覧してもらい、中高生にとって難しいと思われるものに関しては、表現や語尾を書き換えた。

インタビュー調査方法 榎本（2002）による自己物語法に則して、被験者に対して自己語りを求めた。基本的にこのインタビューは非構造化面接であったが、被験者全員に対して「現在の自己をどのようにとらえているか」「一番古い記憶」「幼稚園・保育園時代の自己および印象的な出来事」「小学校時代の自己および印象的な出来事」「小学校から中学校への移行期で印象に残る出来事」「中学時代の印象的な出来事」「中学から高校への移行期で印象に残る出来事」「高校時代の印象に残る出来事」「転機となった出来事」「今後どのような自分になりたいか、どのようなことをしていきたいか」を尋ねた。

3. 結果

因子分析結果に関して先行研究（谷，2001）との比較を行ったところ、因子を構成する項目にいくつか変化がみられた。第1因子「対他的同一性」、第2因子「対自我的同一性」、第4因子「自己斉一性・連続性」は先行研究を踏襲したが、第3因子は先行研究における「対自我的同一性」であった2項目（「自分が何を望んでいるのかわからなくなる時がある」「自分が何をしたいのかわからなくなる時がある」と、「自己斉一性・連続性」であった1項目（「『自分がない』と感ずることがある」）という3項目が抽出された。項目内容は全体として「自分自身で自己像を明確に捉えられている感覚」を表すものと考えられるので「自己感覚の保持」と命名した。各因子の α 係数は、第1因子 = .85、第2因子 = .78、第3因子 = .81、第4因子 = .79、であり、十分な内的整合性があることが確認された。

分散分析およびt検定結果 自己語りを実施した6名の

MEIS 得点データを基に、自己語り実施前、実施直後、実施後の得点で差がみられるか一要因分散分析を行ったが有意な結果は得られなかった。そこで自己語り実施前と実施直後のMEIS得点を用いて t 検定を行ったところ、MEIS 全体の得点と第3因子において、ともに 5%水準で有意な差がみられた(全体得点: $t(5) = 2.88$, $p < .05$) (第3因子: $t(5) = 2.74$, $p < .05$)。

4. 考察

一要因分散分析および t 検定の結果について

自己語りの直後では一時的にはあるが自我同一性感覚が高まり、下位尺度レベルでは「自己感覚の保持」についての感覚が高まる可能性が考えられる。自己語りによって被験者の自己像が生成され明確化したことが「自己感覚の保持」得点の増加につながり、自我同一性感覚を高めた可能性があると考えられる。しかし、自己語りによる効果と考えられる自己像の明確化および自我同一性感覚の高まりは、一時的なものであることが推測された。

研究 I の問題点および今後の課題

今回の研究結果は再吟味する必要がある。まず被験者が 6 名で数が少ないことが問題として挙げられる。被験者の数をより多くして再検討するとどのような結果になるのかを確認すべきである。

また、本研究では聞き手の要因を考慮に入れずに考察を行った。語りによる自己の生成に聞き手の存在が不可欠で重要な役割をはたすという指摘は、語りを論じる際に多数されてきている(榎本, 1999, 2002, 河合, 2001 他)。語り手は聞き手の反応に合わせて語りの内容を変える可能性があり聞き手の聞く姿勢や視点が語りの生成に大きく関与するので、このような問題については語りの内容に踏み込んだ考察が必要であろう。

研究 II 自己語り分析からみる自己の形成過程についての考察

1. 問題と目的

語り手の影響について考察しつつ本来の自己物語法の目的に沿って、語り手の自己の様相について考察していくこととすること、自己概念の形成過程を考察することを目的として語りの内容を分析した。自己意識研究では、自己意識の一側面の発達を横断的データにより考察するものや 20 答法を用いるなどして自己記述の内容の発達の変化をみる研究が主であり、形成過程そのものに焦点を当てているものはほとんどない。これは、調査の方法として質問紙や自由記述を用いると、自己意識の一側面に焦点を絞らざるをえないことが関係しているだろう。その点、本研究では自己物語という時間軸を取り入れた視点で自己を捉えているため、形成の過程に焦点を当てて考察することが可能になる。杉村(1998)の論文では、「具体的にどのような他者が自己形成の過程に登場する

か整理し、その他者が青年の自己形成にどのような役割を担っているのかを整理する必要があること」、「相互調整は具体的にどのような内容がみられるのか調査すること」、「人生の節目に焦点を当てて、そこでの他者との出会いや別れといった対人関係の変化と自己発達との関係を押さえること」が興味深い課題として挙げられている。この点に着目しながら、自己の形成過程を捉えることを目的とする。今回用いた自己物語法によって、この課題に関しても何らかの示唆が得られるだろう。

2. 考察

自己概念の形成過程について 山本(1984)は児童期青年期の人はいろいろな対象を同一化の対象にすると指摘している。今回の自己語りからは憧れの対象としてドラマや漫画の登場人物、人生のモデルとして家族が挙げられた。また、他者との比較により自己を捉える機制も青年には多いことがわかる。今回得られた語りでよくみられた文脈として、小学校までは「優等生」「できる」として捉えられてきた自分が、中学校に入り周りがとてもできるように見えしまうことから、一時的に自信喪失を味わうというものであった。その一方で、母親から「あなたは頑張ればできるから大丈夫」という言葉をかけられたことによって自信を取り戻したり、先生からもっと期待してほしいという言葉に表れるように、他者から期待をかけられることや励まされることによって、自信を失いがちな自己が励まされることが伺えた。また、親からフィードバックされた自分の特徴に自己概念が引きずられることを自覚している語りも見られた。このように、他者との比較、期待や励まし、さらにフィードバックによって自分の自己概念が形成されていく過程が見られた。

対人関係における葛藤やその解決についての語りで挙げられたのは、友達との葛藤が主なものであった。父親との葛藤を語るものもあり、この時期の青年にとっては、学校での友人関係や家族との関係が大部分を占めていることがわかる。人の悪口を言ったことで先生や友達から責められたことで、悪口は言わないようになったというように自分の姿勢を変えていくことや、劇などのひとつの目標が達成されるまではお互い歩み寄ろうとする姿勢を持つことによって他者とうまく適応していこうとしている。父親との葛藤での語りでは、父親の嫌な部分を客観的に捉えて距離を持つことで葛藤から目をそむけるもなく対峙していこうとする態度が伺えた。

今回の語り手にとって大きな人生の転換期といえば中学校の入学が挙げられるだろう。そこでの人間関係の変化によって自分を変えるきっかけとなったと捉える語りがいくつかみられた。ある語りからは、他者の価値観に出会い認めるような視点が形成されたことがわかる。また、他者の考えによって影響を受けることが自己の成長に関わっていることが示唆された。